

淡青

t a n s e i

36

2018/03

[特集]

UTokyo 3.0突入記念
「タイムラプス」スペシャル

画像でたどる 東大140年

門、建物、記念碑、肖像、構内図、
ロゴ、グッズ、パンフ、ユニフォーム……

[サイエンスへの招待]

森を食べる植物
ゆらぎ渦巻く情報造形の世界



淡青

t a n s e i

36

2018/03

今号の表紙は、内田祥三の設計で1938年に竣工した本郷・法文2号館。三廊式の古風なアーケードや渦巻状の飾りがついた列柱が印象的なこの建物は、事務室と多くの研究室を構える文学部の関係者のほか、食堂や購買部や床屋などが並ぶ地下店舗街目当ての構成員にも利用されています。



「淡青」について

東京大学と京都大学（当時は東京帝国大学、京都帝国大学）が1920年に最初の対校レガッタを瀬田川で行なった際、抽選によって決まった色が「淡青」（ライトブルー）でした。本学運動会応援部の旗をはじめとして、スクールカラーとして定着しています。

特集「画像でたどる東大140年」をお届けします。今号のページをめくると、100年以上も前の正門が私たちを迎えてくれます。その先にある安田講堂が竣工したのは、1925年。江戸時代の姿を残す赤門に想いをはせて、三四郎池でスケートを楽しむ学生たちの写真にタイムスリップした感覚に陥ります。駒場キャンパスの「弥生道」は、学生紛争の時、騒乱の道と化したこともあります。時代を超えてさまざまな思ひにふけり、思索する学生たちの足跡を刻んでいます。写真からみる今と昔に、さまざまな想像力が掻き立てられます。140年の時代の一齣を、画像を通して感じていただけたら幸いです。

次なる70年（「UTokyo 3.0」）の入り口をくぐった今、2027年に150周年を迎えるにあたり、未来を展望する取組もまたすでに始まっています。

東京大学広報室長 白波瀬佐和子

編集発行／東京大学広報室
白波瀬佐和子（広報室長 人文社会系研究科教授）
広報誌部会／
木下正高（地震研究所教授）
ラルフ・ウィロックス（数理科学研究科教授）
鴨川達夫（史料編纂所教授）
高井次郎、濱田英梨子（広報課）
中丸典子（卒業生課）
森和博、梶野久美子（卒業生室）

アートディレクション／細山田光宣（細山田デザイン）
デザイン／グスクマ・クリスチャン（細山田デザイン）
撮影／貝塚純一（p1,24-27）、井上匠（p3,8）

印刷／図書印刷
発行／平成30年3月9日

【淡青】お取り寄せ方法



テレメールで【淡青】を取り寄せることができます。以下のURLまたはTEL（自動応答電話）にアクセスし、資料請求番号をご入力ください。送料はご負担ください。



URL：http://telemail.jp
TEL：050-8601-0101（24時間受付）
資料請求番号：950643
送料：180円（後納）

contents

p.03-27

【特集】

UTokyo 3.0突入記念「タイムラプス」スペシャル
画像でたどる東大140年

p.03-09

写真でたどる昔と今の建造物

p.10-11

構内図と分布図でたどる
キャンパスの変遷

p.12-15

記念碑&記念像できた順アルバム

p.16-17

博士たちの肖像
～歴代総長&主要国際賞受賞者編

p.18-19

部局ロゴマークできた順アルバム

p.20-21

東大・歴史的グッズ集

p.22-23

五月祭パンフレットと
野球部ユニフォームの変遷

p.24-27

座談会
東大140年、回顧と展望

p.28-29

【サイエンスへの招待】【芸術と科学への招待】
森を食べる植物 塚谷裕一
ゆらぎ渦巻く情報造形の世界 河口洋一郎

p.30-31

東京大学トピックス

1911(明治44)年頃



UTokyo 3.0突入記念「タイムラプス」特集

画像でたどる東大140年

門、建物、記念碑、肖像、構内図、
ロゴ、グッズ、印刷物……

70年を1単位とすれば、UTokyoは第3期に入ったところ。

来し方を振り返るのには適した頃合いです。そこで本特集。

学内に蓄積された画像類の数々をテーマ別に整理して提示し、

140年の変遷を視覚的にざっくりたどっていただくという趣向です。

文は最小限。画は最大限。ドンと見据えて、Don't miss it!

正門

1911年の法科大学（後の法学部）卒業アルバムに写る木製の仮正門には「東京帝国大学」の表札が。安田講堂はまだなく、道の彼方に見えるのは理科大学（後の理学部）です。冠木を擁する現在の正門は1912年の建造。1940年には来学した昭和天皇が車でぐる姿を、1989年の崩御時は甲旗掲揚反対派と大学職員が押し合う姿を目撃しました。

2017(平成29)年



1940(昭和15)年



1972(昭和47)年

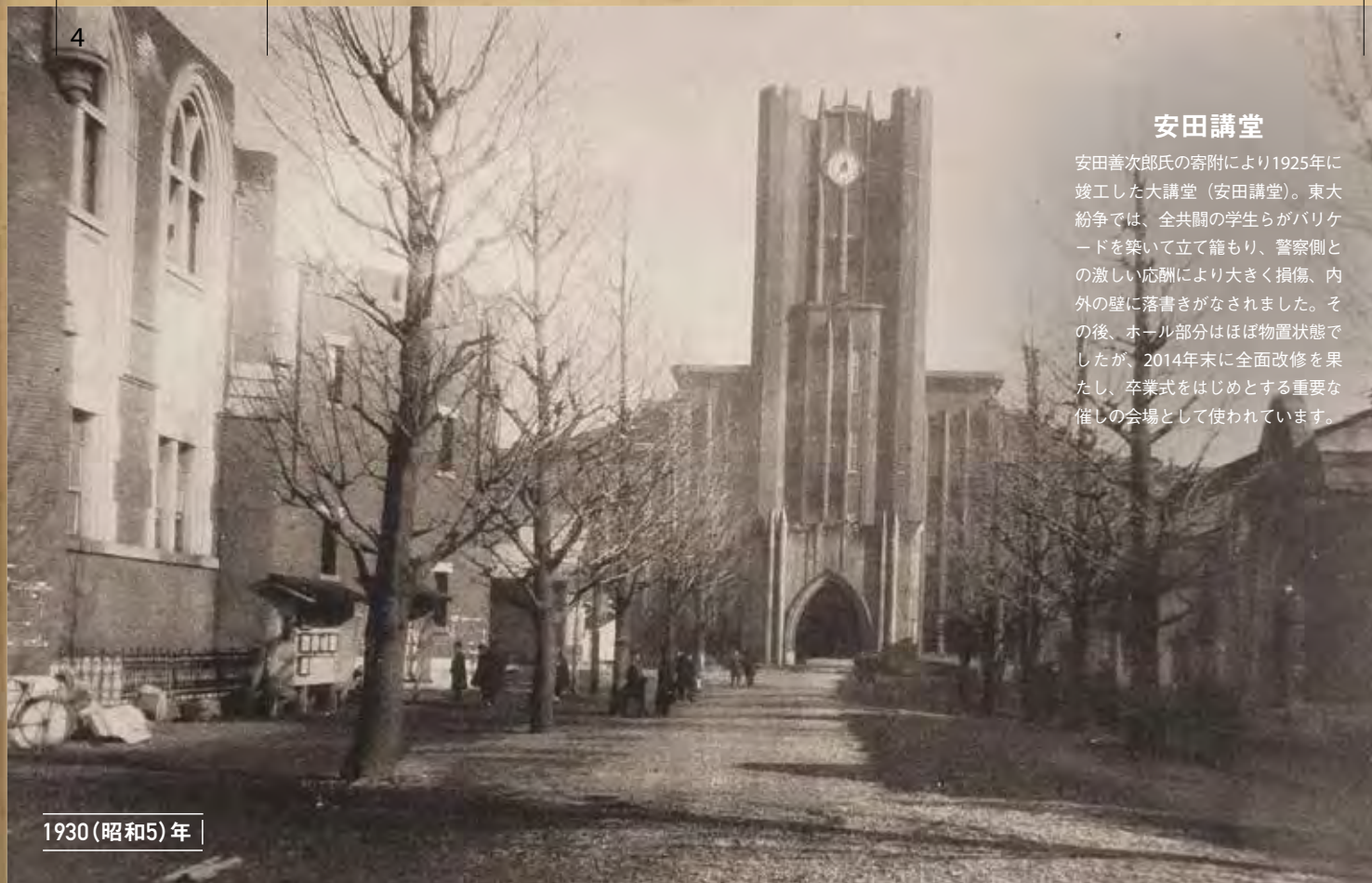


1989(平成元)年



安田講堂

安田善次郎氏の寄附により1925年に竣工した大講堂（安田講堂）。東大紛争では、全共闘の学生らがバリケードを築いて立て籠もり、警察側との激しい応酬により大きく損傷、内外の壁に落書きがなされました。その後、ホール部分はほぼ物置状態でしたが、2014年末に全面改修を果たし、卒業式をはじめとする重要な催しの会場として使われています。



1930(昭和5)年



1924(大正13)年



1969(昭和44)年



1969(昭和44)年



1974(昭和49)年



1988(昭和63)年



2018(平成30)年



1923(大正12)年



1939(昭和14)年

赤門

1827年、前田齊泰が溶姫を迎えるために建てられた赤門。学内に残る最も古い写真（『東京帝國大學五十年史』より）では今と変わらぬ姿が確認できます（位置は約15m移動）。1923年の関東大震災直後には安否確認や伝言の貼り紙が。後に「國寶赤門」の標柱が立ちましたが、重要文化財となったため「國寶」部分を朱で上塗り。現在は「赤門」の新標柱が立っています。



1886(明治19)~1898(明治31)年



2018(平成30)年

龍岡門

東大病院に通じ、都バスやタクシーなども行き交う龍岡門。昔は他の門と同様に開閉する扉を備えていました。1912年の医学部卒業アルバムは着物姿で扉を抜ける人々を、1981年の記録写真は扉の横を窮屈そうに通過するバスを捉えており、門の幅が狭かった時代を偲ばせます。夜間診療所だった隣の建物は、広報センターに。門を入ったところには本部棟がそびえます。

1912(大正元)年頃



1981(昭和56)年



1933(昭和8)年



2017(平成29)年

1937(昭和12)年



1955(昭和30)年頃



1989(平成元年)年

弥生門

浅野地区や根津駅方面から本郷地区に向かう際に便利なのが弥生門。入って正面にそびえるのは、内田祥三の設計により1939年に竣工した工学部3号館です(1937年の写真にはまだありません)。2010年に取り壊されましたが、旧館のデザインを継承しつつ各所に先進的な機能を取り入れる形で2013年に新3号館として生まれ変わりました。

2018(平成30)年



1935(昭和10)年



1938(昭和13)年頃



2007(平成19)年

農正門

かつて向ヶ岡の地にあった第一高等学校。1935年、駒場の帝大農学部との敷地交換が成立し、一高生たちは向陵正門を後にしました。1937年、向陵正門があった位置に建造されたのが農正門。正門前を行き交う車や街並が時代の変遷を伝えます(写真は農学部所蔵)。2003年、農正門の改修が行われ、扉材は樹齢数百年の木曾檜に。

2017(平成29)年





1928(昭和3)年



1924(大正13)年以前



1977(昭和52)年

三四郎池

1928年の卒業アルバムには凍った池でスケートを楽しむ学生たちの姿が。夏には遊泳に興じる写真もあり、今よりもっと憩いの場だったことが窺えます。池を見下ろすように建つ本部と山上会議所は、事務室や会議室として使われましたが、関東大震災で焼失(1935年に山上会議所を再建。1986年に山上会館が竣工)。1977年には大規模な池の浚渫が行われています。



2018(平成30)年



1955(昭和30)年頃

工学部2号館

内田祥三が構内で設計した最初の建物(1924年竣工)。価値を守りつつ施設拡充の需要に応えんと、旧館の上に高層階を持つ新館を載せるという手法を採用、2005年に実現しました。



2017年(平成29)年



1988(昭和63)年

東京大学オフィシャルショップ コミュニケーションセンター

1910年に建設され、車庫や図書館製本所として使われた、現存する中では博物館小石川分館に次いで古い建物。2005年、公式グッズを販売し社会との接点となる場に生まれ変わりました。

2017(平成29)年



1989(平成元年)年



御殿下記念館

百周年記念でグラウンドの下にできた総合体育施設。旧運動場附属施設の一部も再利用した建物には、一時期そば屋やパン屋などのお店もありましたが、今は学生支援系の部署が集結しています。



2017(平成29)年



1940(昭和15)年代?



1950(昭和25)年代?



1969(昭和44)年頃



2017(平成29)年

弥生道

駒場Iキャンパスの敷地を東西に走る銀杏の並木道は、弥生地区にあった一高が駒場に移転した際、当時の森巻吉校長が「弥生道」と名付けました。昔も今も、駒場で暮らす学生にとっての思索と逍遙の道です。ただ、東大紛争期には、騒乱の道ともなりました。

1935(昭和10)～1945(昭和20)年



駒場正門

表札は第一高等学校から東京大学教養学部になりましたが、柏(オーク)の葉と橄欖(オリーブ)の葉・実を合わせた大扉の透かし模様は変わりません。もちろん一高の紋章です。時計棟の本館は現在は1号館と呼ばれます。

2017(平成29)年



1935(昭和10)～1945(昭和20)年



駒場東大前駅

昔は東駒場と西駒場の2駅がありました。東駒場駅は一高前駅に改称し、1951年に東大前駅に。1965年には西駒場駅から改称した駒場駅と統合して駒場東大前駅となりました。一高前駅は梅林門を出た踏切付近にありました。

2017(平成29)年



13号館

越中島から移転した航空研究所を継承する駒場Ⅱキャンパス。正門を入れて正面に構える航空研究所本館は、13号館へと呼称が変わり、現在は先端科学技術研究センターが使用しています。植樹の成長が時の流れを伝えます。



1931(昭和6)年頃



2017(平成29)年

物性研究所

柏キャンパスで行われた物性研究所と宇宙線研究所の竣工披露記念式の写真を見ると、物性研の西側にはまだ何も無い状態。新領域創成科学研究科の研究室などが入る新領域基盤棟が竣工したのは、2003年のことでした。



2000(平成12)年



2017(平成29)年

2000(平成12)年

2017(平成29)年

宇宙線研究所

スーパーカミオカンデのタンクをイメージした吹き抜けが特徴の宇宙線研究所。その西側は空地でしたが、2009年、「螺旋運動するアカデミア」というコンセプトで設計されたカブリ数物連携宇宙研究機構棟が竣工しました。



1918(大正7)年頃

2017(平成29)年

医科学研究所表門

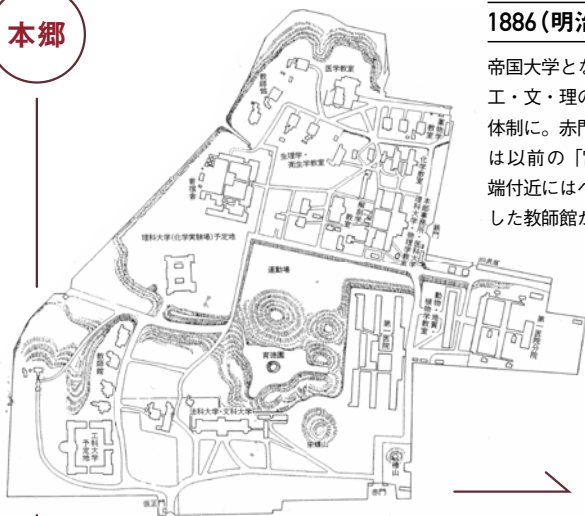
1905年に白金台に移転した伝染病研究所は、1916年に東京帝国大学附置となり、1967年に医科学研究所となりました。1918年の医学部アルバムには「東京帝国大学伝染病研究所」の表札がかかる門の写真が収められています。



構内図と分布図でたどる

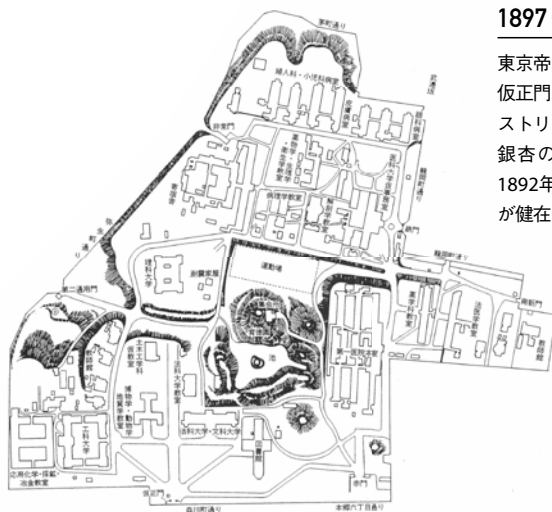
東大キャンパスの変遷

本郷



1886(明治19)年

帝国大学となり法・医・工・文・理の5分科大学体制に。赤門近くの椿山は以前の「富士山」。東端付近にはベルツも居住した教師館が。



1897(明治30)年

東京帝国大学になった年。仮正門から伸びるメインストリートが見えますが銀杏の植樹はまだ先。1892年竣工の旧図書館が健在です。



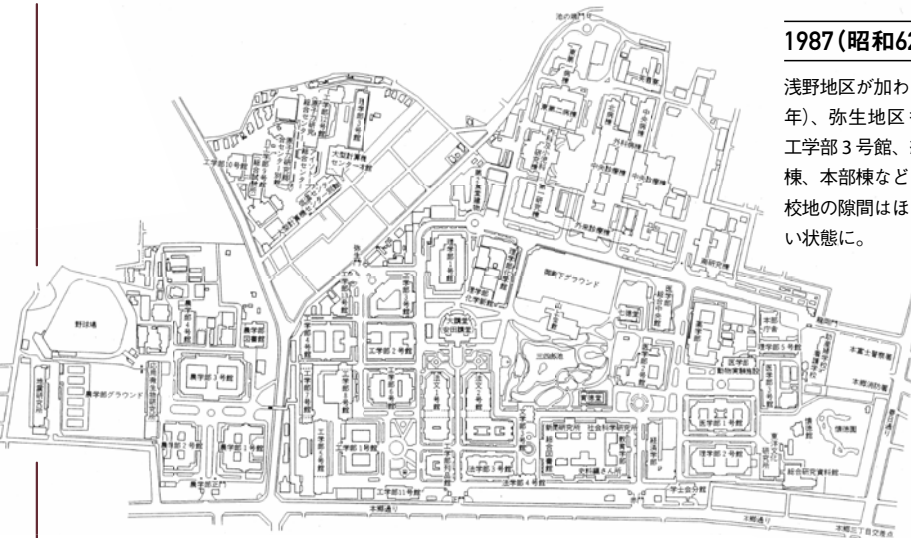
1923(大正12)年

関東大震災の年。図書館、法科大学八角講堂、理学部本館など多くの建物が焼失しました(黒色は被害を受けた建物)。1921年起工の安田講堂は建設の最中です。



1936(昭和11)年

前田侯爵家との土地交換(1926年)で南西部が広がり、一高との土地交換(1935年)で弥生地区が加わりました。七徳堂誕生はまだ先。



1987(昭和62)年

浅野地区が加わり(1941年)、弥生地区も拡充。工学部3号館、経済学部棟、本部棟などが建ち、校地の隙間はほぼ見えない状態に。

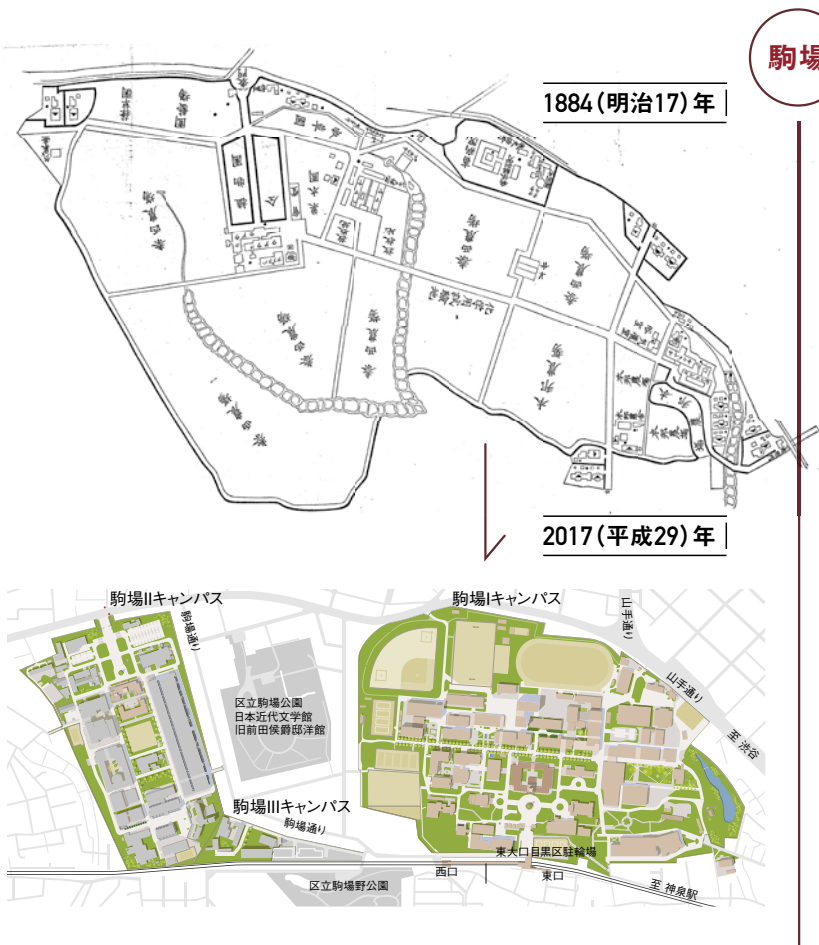
2017(平成29)年

赤門の並びに伊藤謝恩ホールや情報学環・福武ホール、懐徳館東に産学連携施設などが出現。構内整備は今日もどこかで進んでいます。



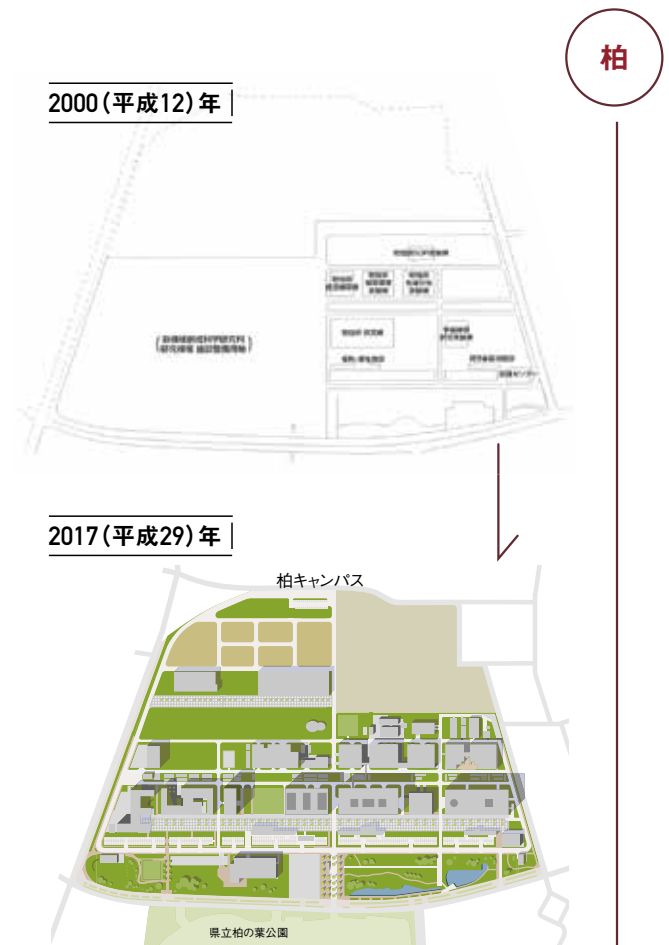
創設時には神田錦町(法・理・文)と神田和泉町(医)にあった東大のキャンパスですが、現在は本郷、駒場、柏、小石川、中野、白金台、田無、三鷹……と様々な場所で研究・教育活動が行われています。

ここでは、三大キャンパスの構内図などを見ながら140年にわたる校地の変遷を概観しましょう。



駒場農学校は1890年に帝国大学農科大学に。農科大学から改称した農学部は1935年に本郷へ移り、かわりに駒場に来た一高は1949年に教養学部に移行。1926年、現在の駒場公園エリアが前田家の所有となり、駒場地区はⅠとⅡ、2つのキャンパスに大別されました。

駒場



米軍通信所跡地で始動した柏地区。当初は物性研究所と宇宙線研究所だけでしたが、その後、新領域創成科学研究科、カブリ数物連携宇宙研究機構、大気海洋研究所、生産技術研究所附属千葉実験所も仲間に。今は柏Ⅱ、柏の葉駅前と合わせた体制となっています。

柏



東京大学施設分布図

現在施設があるのは53ヶ所(20都道府県)。東京開成学校があった神田錦町、東京天文台があった狸穴町、物性研と生研があった六本木、果樹園があった二宮町、谷川寮があったみなかみ町、第二工学部があった西千葉など、過去に大変お世話になった場所も数多あります。

できた順

本郷・駒場の 記念碑&記念像アルバム

先人たちが意図して残してきたモニュメント60

本

江戸時代

山上会館脇石垣



会館建設時に発掘された江戸初期の石垣を移築し、保存。金沢城のものと共通する刻印が残ります。

本

江戸時代

東御長屋下水排水口



ローソン龍岡門店裏に広がる塀の基礎部分に下級武士が住んだ東側の長屋の下水排水口が残っています。

本

江戸時代

東御長屋前井戸



「加賀藩江戸御屋敷長屋絵図」に記載がある長屋前の井戸の跡。ローソン龍岡門店の歩道脇に現存。

本

1893

ベルツの庭石



富山藩御殿の庭園にあった庭石。隣の教師館に住み庭を愛した先生の名が呼称に残ります。入院棟A前。

本

1895

ミュルレル像



外科、眼科などを教えたLeopold Muller先生。教え子らが建立した像は、盗難を経て1975年に復元。

本

1900

ダイバース像



化学教室の礎を築き名誉教師の称号を受けたEdward Divers先生。移転を経て現在は化学館脇に。

駒

1902

プッチール像



一高で独語を教えたFriedrich Putzier先生。没後、向ヶ岡に像が建ち、後に駒場へ（アリヴェ像と同様）。

本

1907

前田侯爵邸西洋館基礎



後に懐徳館となる邸は1945年の空襲で焼失。博物館増築時に基礎が出土し懐徳門脇に保存されました。

本

1907

ベルツ像



医学部で内科と産婦人科を担当したErwin Bälz先生。在職25年記念の祝賀会は小石川植物園で開催。

弥

1912

朱舜水記念碑



明の遺臣である儒学者が徳川光圀に迎えられて水戸藩中屋敷へ。渡来250周年の碑は歩道橋近くにあり。

本

1914

三好晋六郎像



英国留学から帰国後、新設の工科大学造船学科教授に。像が持つ本はManual of naval architecture。

本

1915

下山順一郎像

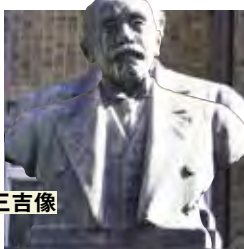


ドイツ留学から帰国後、新設の医科大学薬学科教授に。薬学博士の第1号。像は薬学系総合研究棟脇に。

本

1924

佐藤三吉像



附属医院院長、医科大学学長として活躍。執刀中の姿も付いた像はともに留学した青山先生の並びに。

本

1928

ヒマラヤスギ由来の碑



1907年に濱尾総長の命で植えた300本のうち残った1本を記念した碑。今も樹は濱尾像裏で茂ります。

本

1932

濱尾新像



在任期間計11年3月。銀杏並木の父でもある総長の像は構内一巨大。池を背景に安田講堂を見つめます。

大学には碑や銅像などの記念物が数多あります。

マップなどで空間的に確認することはあっても、できた順に見る機会はあまりないはず。

そこで、本郷と駒場で無理なく見られる60アイテムを選び、時系列に並べます。

人の強い思いがあってこそ時代を越えて残ったモニュメントたち。通り過ぎるだけでは不憫です。

本 = 本郷
駒 = 駒場
浅 = 浅野
弥 = 弥生

※構内にはここで取り上げたほかにもいろいろなモニュメントがあります。

本

江戸時代



蛇塚(お化け灯籠)

不義を働き蛇で折檻されて死んだ女中を弔う塚(真偽不明)は工学部前広場に。動かすと不幸になる!?

浅

1828



向岡記碑

水戸藩中屋敷に徳川齊昭が建立。碑文の「夜余秘」が弥生町の名に。浅野南門に入ってすぐの坂にあり。

本

1833



育徳園丘上の碑

富山藩邸(現・病院地区)に仏像を安置する旨を記した碑。宗藩の邸があった現地に移った理由は未詳。

駒

1900



春宮慶禮紀年之松碑

明治天皇の第三皇子(嘉仁親王)の御成婚に際して一高生が植樹した松とその碑。移植の時期は未詳。

弥

1902



ヤンソン像

駒場の家畜病院で獣医学教育に貢献したJohannes Jansson先生。名誉教師称号授与記念像は後に弥生へ。

駒

1902



アリヴェ像

Jean-Baptiste Arrivet先生は一高で仏語教育に貢献。像は東大紛争時に長野に避難し、2004年に再建。

本

1907



スクリバ像

外科を担い、名を「須楽場」と書いたJulius Scriba先生。ヘルツ像とともに病院を見守ります。

本

1910



ウェスト像

Charles West先生は機械工学と造船学を教授。像の底部には製図器具、機械、造船所などの浮き彫りが。

本

1911



明治天皇行幸記念碑

前年の行幸の碑は懐徳館庭園の築山に。2015年に名勝に指定された庭はホームカミングデイに公開。

本

制作年不詳



隈川宗雄像

ドイツ留学から帰国後、医科大学教授となり生化学を開拓。鶏のパネルがある像は医学部2号館裏に。

本

1920



青山胤通像

ドイツ留学から帰国後、医科大学で内科学を担当し、学長を16年も務めました。像はバス通り沿いに。

本

1922



コンドル像

Josiah Conder先生は1877年から建築教育と設計に従事。台座を邪鬼が支える立像は工学部前広場に。

駒

1933



橄欖の碑

書は一高の齋藤阿具教授。欧州から持ち帰って向ヶ岡に植えたオリーブを駒場に移植し、隣に碑も建立。

本

1935



相良知安先生記念碑

医学取調御用係としてドイツ医学採用を推進し医学部の礎を築いた先生。2007年に入院棟A前に移設。

弥

1935



向陵碑

一高移転に際して決別の念を刻んだ碑。「嗟夫向陵よ、汝の精神は長へに我が高校とともに相ひ終へん」。

駒

1935



斯波忠三郎先生記念碑(航空碑)

所長として航空研究所の駒場移転に尽力した先生を記念した「航空」像。躍動感のある像は吉田三郎作。

駒

1936



駒場農学碑

一高との敷地交換に際し駒場が農学発祥地であることを刻した碑。農学部長を務めた高橋偵造先生の書。

本

1937



古市公威像

初代工科大学長、工学博士第1号、土木界のボスとして活躍。像は本郷通り際から工学部地区を睥睨。

浅

1976



弥生三丁目遺跡

1884年に根津の谷付近で発見された壺は、後に地名から弥生式土器と命名され、一帯が国指定史跡に。

本

1981



水原秋桜子の句碑

「胸像をぬらす日本の花の雨」。医学部出身俳人が日本医学に寄与したベルツ先生の功績を想って句作。

本

1981



医学図書館20周年記念碑

健康と医学の博物館（2019年4月移転に向け休館中）脇の塀に医学部紋章がモチーフのレリーフが。

駒

1996



矢内原門跡

商店街へ抜ける通用口は、矢内原忠雄教養学部長が通ったことで矢内原門の名に。今は碑が残るのみ。

本

1998



大聖寺藩江戸上屋敷跡の碑

3代加賀藩主前田利常が三男利治に分封した大聖寺藩。江戸藩邸跡の碑には利治由来の九谷焼の絵皿が。

本

2002



育徳園心字池石碑

前田家18代当主・前田利祐氏の書による「舊加賀藩上屋敷教育徳園心字池」碑。園に入ってすぐ右手に。

駒

2004



第一高等学校寄宿寮跡

本郷時代から学生自治を続けた一高寄宿寮。駒場移転後の寮跡には地下道入口上屋の外壁の一部が現存。

本

2005



有馬朗人句碑

俳人でもある元総長作「銀杏散る万巻の書の頁より」。隣の師・青邨の碑とともに平和と学問の価値を表現。

本

2006



山川健次郎像

元白虎隊士で「星座の人」と呼ばれた名総長の像は曾孫ご夫妻とお孫さんの寄贈。理学部1号館前に。

本

2009



医学部150周年記念モニュメント

学生公募の最優秀作。人が向き合って球を支え、全体でMedicineのMを象る像は、医2号館本館前に。

駒

2009



護国旗

文を象徴する檜欅と武を象徴する柏葉に「國」を配した一高校旗のレリーフ。1号館裏のアーケードに。

駒

2009

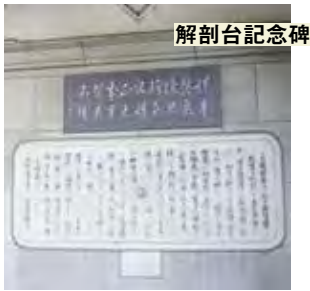


新墾之碑

「駒場の玉杯」といわれた第47回記念祭歌詠「新墾の此の丘の上」碑。一高同窓会が矢内原公園に建立。

本

1941



解剖台記念碑

実際の台が医2号館東入口に。病理学教室の三浦守治・山極勝三郎両先生は献体のため最期にこの台に。

駒

1958



嗚呼玉杯之碑

「嗚呼玉杯に花うけて」で始まる代表的な一高寮歌の碑を卒業生が建立。ファカルティハウスの庭に。

弥

1974



動物慰霊碑

動物医療センター（旧・家畜病院）の裏に世を去った動物の墓が。卒塔婆から飼い主の情が伝わります。

弥

1983



地震学発祥記念碑

本郷時代の建物にあった地震計型オブジェを継ぐ碑。1998年、タイムカプセルとともに地震研正門脇へ。

浅

1986



弥生式土器発掘ゆかりの地

水戸藩から一部を引き継いだ浅野家が由来の浅野地区と言間通りの間に立つ石碑は地元町会有志が建立。

本

1986



山口吉郎句碑

鉱山学科教授は青邨の号を持つ俳人。心字池畔の「銀杏散るまつたゝ中に法科あり」は日米開戦時の作。

本

2003



小柴昌俊記念植樹(カイノキ)

ノーベル賞受賞記念。中国の孔子廟由来の種から育成した木は、今も理学部1号館前でゆっくり成長中。

駒

2004



一高ここにありき碑

一高同窓会の本格的活動終了に際し建立。向陵精神を汲むよう訴える碑は駒場正門に入って左の空間に。

駒

2004



ストレンジ顕彰レリーフ

Frederick Strange先生は英語教育の傍ら諸競技を紹介した近代スポーツの父。像はグラウンド脇に。

弥

2007



東大球場70周年記念植樹

後に総長となる濱田純一理事・副学長がバット材になるアオダモを球場脇に植樹。木は3倍以上に成長。

本

2008



看護学校・助産婦学校記念碑

長い歴史を誇った医学部附属の両校は2002年閉校。医学部5号館となった校舎前の碑に校章と校歌が。

駒

2008



KONOHAベンチ

130周年記念事業の一環で、日本漢字能力検定協会が寄贈。木の葉の柄も見えるベンチは講堂の裏手に。

本

2010



梅謙次郎博士追慕植樹碑

民法典に貢献した梅博士を偲ぶため、没後百年を前に三たつ木斛を植樹。本郷通り沿いのパーゴラ脇に。

弥

2011



向ヶ岡学寮址の碑

1949年に竣工し2003年に閉寮。向ヶ岡ファカルティハウスとして再生後、中庭に元寮生らが碑を建立。

弥

2015



上野英三郎博士とハチ公像

ハチの主は東大教授だと知られていないことを憂えた有志が建立。両者は弥生で再会を喜んでいます。

1.1886年、初代総長に。教職員出身でない唯一の総長。 2.東京大学総理、元老院議員を経て1890年に2代総長に。 3.1893年に3代総長、1905年には8代総長に。構内整備を進めた「土木総長」。 4.1897年に4代総長に。「万歳」の音として「バンザイ」を考案。 5.1898年、5代総長に。北海道演習林の大麓山はこの人に由来。 6.6代、9代と2回総長を務め、在任期間は歴代最長。 7.1905年に7代総長に(在任13日)。 8.1920年、10代総長に。農学生命科学図書館に立像、富士癒しの森研究所の敷地には「古在ヶ原」が。 9.日本近代政治学の嚆矢。前総長の療養を受けて総長代理となり、1928年に11代総長に。 10.1934年、12代総長に。野球部一誠寮竣工時、額の「誠」字の一面を抜いて揮毫、優勝時に書き足すと言って学生を鼓舞。 11.1938年、13代総長に。第二工学部設置に尽力した「軍艦総長」。 12.1943年に14代総長に。米軍との交渉に奔走し大学接収を阻止。 13.1945年、15代総長に。終戦後の国民を励まししながら教育制度を改革し、新制大学への転換を主導。 14.1951年、16代総長に。時に警察と対立しながら大学自治と学問の自由を死守。 15.1954年、調積分論の研究によりフィールズ賞を受賞(日本人初)。 16.1957年、17代総長に。卒業式で言及した「小さな親切」が一大運動に。 17.1963年、18代総長に。卒業式告辞原稿に「太った豚より痩せたソクラテス」の話を引き話題に。 18.1968年、ノーベル文学賞を受賞。記念講演「美しい日本の私」も話題に。 19.総長代行として東大紛争を収拾、1969年に19代総長に(史上最年少)。 20.1973年、20代総長に。文学部長時代、軟禁状態で170時間もの団交を行い屈しなかった逸話あり。 21.1973年、半導体と超伝導体におけるトンネル効果の発見でノーベル物理学賞を受賞。1998年には日本国際賞を受賞。 22.1974年、非核三原則の提唱でノーベル平和賞を受賞。 23.工学部長を経て百周年の節目の1977年に21代総長に。 24.1981年、22代総長に。入学式では「真剣な道草」の価値を強調。 25.1985年、23代総長に。入学式では世界文化にただ乗りするなど訓示。 26.1987年、確率論における貢献に



東大の140年を牽引した 博士たちの肖像

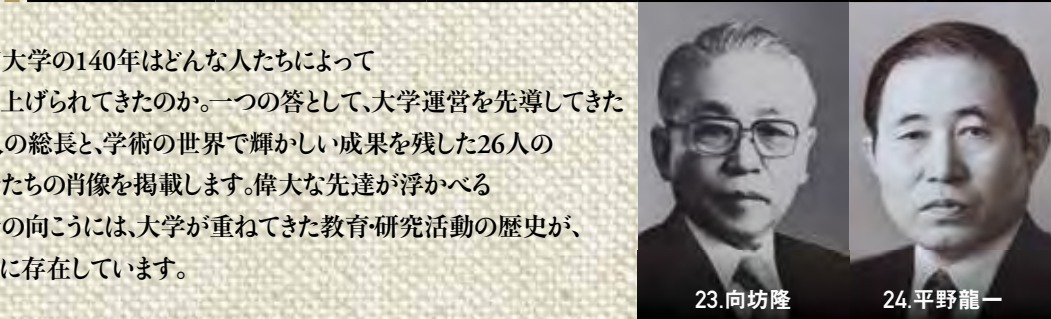
～歴代総長&主要国際賞受賞者編～

※主要国際賞について
ここでは、ノーベル賞、ウルフ賞、クラフォード賞、日本国際賞に加え、数学のノーベル賞と呼ばれるフィールズ賞、建築のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞、森のノーベル賞と呼ばれるマルクス・ヴァーレンベリ賞を対象に、東大出身の受賞者の写真を掲載しました(受賞が複数に及ぶ人ももちろんいます)。

Niss, Jacod / Aneiro



東京大学の140年ほどどんな人たちによって積み上げられてきたのか。一つの答として、大学運営を先導してきた28人の総長と、学術の世界で輝かしい成果を残した26人の博士たちの肖像を掲載します。偉大な先達が浮かべる表情の向こうには、大学が重ねてきた教育・研究活動の歴史が、確かに存在しています。



よりウルフ賞を受賞。 27.1987年、日本人として初めてブリツカー賞を受賞。 28.1989年、24代総長に。大学院重点化に舵を切り、今に至る姿を提示。 29.1993年に25代総長に就任。1997年にはロボット産業創設などの功績で日本国際賞を受賞 30.1993年、知的かつ芸術的な概念を丁寧に表現したとしてブリツカー賞を受賞。 31.1994年、現実と神話が変わる世界の創造によりノーベル文学賞を受賞。 32.1996年、小脳の機能原理と神経機構の解明により日本国際賞を受賞。 33.1997年、26代総長に。入学式では、入学は知性による過酷な闘争の始まりだと訓示。 34.1997年、がんの原因に関する基本概念の確立で日本国際賞を受賞。 35.2000年、免疫グロブリンEの発見とアレルギー発症機序の解明で日本国際賞を受賞。 36.2001年、27代総長に。法人化後の憲法というべき東京大学憲章を2003年に制定。 37.2002年、ニュートリノ検出への貢献でノーベル物理学賞を受賞。 38.2003年、代数学解析の創造によりウルフ賞を受賞。 39.2003年、磁気共鳴機能画像法の基礎原理発見で日本国際賞を受賞。 40-41.2004年、水の光分解触媒の発見などにより日本国際賞を受賞。 42.2005年、28代総長に。「知の構造化」「自律分散協調系」を掲げ、世界一の総合大学を標榜。 43.2008年、自発的対称性の破れの発見でノーベル物理学賞を受賞。 44.2009年、29代総長に。東大生は「タフであれ」のメッセージで話題に。 45.2010年、パラジウム触媒クロスカップリングでノーベル化学賞を受賞。 46.2013年、革新的な建築の実現によりブリツカー賞を受賞。 47.2015年、30代総長に。「知のプロフェッショナル」を育て人類に貢献する大学を標榜。 48.2015年、ニュートリノ振動発見によりノーベル物理学賞を受賞。 49.2015年、「分子進化のほぼ中立説」でクラフォード賞を受賞。 50.2015年、流域管理の革新的概念創出などにより日本国際賞を受賞。 51-53.2015年、セルロースナノファイバーの触媒酸化の研究でマルクス・ヴァーレンベリ賞を受賞。 54.2016年、オートファジーの仕組み解明によりノーベル生理学・医学賞を受賞。



学部・研究科・附置研究所の

ロゴマークできた順アルバム

シンボルだけでたどる部局史

今号の特集の趣旨を踏まえ、部局のロゴマークを時系列で一覧します
(マークがない部局もあることにご注意)。数々の図案からは、機関の特徴を
少しでも伝えたいという想いに加え、時代の気配もそこはかとなく漂います。
さらにおまけとして、日々PR活動に勤しむ学内マスコットたちの姿も紹介します。



1988年

薬学系研究科・薬学部

薬学を表すΦを銀杏の葉で象り、
銀杏の軸部分の∞と合わせて
「薬学部は永遠」を表現。



1992年

医科学研究所

DNAの二重螺旋が細胞あるいは
ウイルス粒子を表現。創立100
周年を記念して誕生。



1994年

地震研究所

地球の内部構造図をリンゴに見
立て、櫛型切りにしたもの。当
時大学院生の河原純さん作。



1994年

分子細胞生物学研究所

応用微生物研究所からの改組を
機に図案を募り教職員投票を経
て決定 (IMCBは英語略称)。



2004年

「東大マーク」

法人化に際して銀杏バッジをも
とに制定。上の葉は秋の銀杏色、
下の葉はスクールカラー。



2004年

情報理工学系研究科

研究科の英語略称であるISTに東
大の象徴である銀杏の葉を組み
合わせたデザイン。



2004年

公共政策学連携研究部・教育部

国際展開のために決めた英語略
称をロゴ化。デザイン会社案を
教員で議論し決定したもの。



2005年

宇宙線研究所

所内公募で選定 (土屋兼一さん
作)。超新星爆発、重力波、チ
ェレンコフ光などをイメージ。

東大文

2010年

人文社会系研究科・文学部

ウェブの改修を機に誕生。こめ
られたのは、文学部は人間につ
いて考えるとこどどかと思ひ。



2010年

大気海洋研究所

イメージ源泉は北斎「神奈川沖
浪裏」。大自然の神秘に挑む研
究所を表現。今田由紀子さん作。



2011年

農学生命科学研究科・農学部

銀杏の葉でAgricultureのAを描
き、DNAの二重螺旋を表現。公
募で高橋祥子さんの作品を選定。



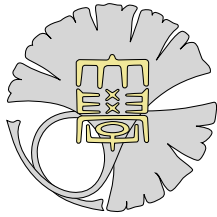
2011年

新領域創成科学研究科

柏の青葉と黄葉を表現。枝の広
がり新分野への成長性と諸
学のネットワークを示唆。



※表示は機関の創設年ではありません。
※ロゴマークの図案のみを掲載しています。



1948年

「銀杏バッジ」マーク

東大生の目印としてバッジの図案を募り、全79作から第二工学部星野昌一教授案を採用。



1956年

医学系研究科・医学部

医学部百周年の記念に、かつては医学部の門として使われた赤大門を緒方富雄教授が図案化。



1982年

物性研究所

英語略称のISSPを5葉の銀杏で囲んだデザイン。創立25周年の公募で採用されたもの。



1999年

総合文化研究科・教養学部

3枚の銀杏の葉で学部前期・後期・大学院の教育の融合を象徴。(株) 禪の石塚静夫さん作。



2000年

情報学環・学際情報学府

英語名の3つの「i」を図案化。iの頭が隣にずれているのは異分野と結びつく学環の象徴。



2001年

東洋文化研究所

甲骨文の「東」を図案化。青黄の弧が東洋と非東洋の地域、赤緑の経緯線の交点が研究所を表現。



2006年

数理学系研究科

銀杏の葉を測地線で表現。上に伸びる形は研究の広がりを象徴。デザインは河野俊丈教授。



2006年

工学系研究科・工学部

3つの丸の結びつきでTechnologyのTを柔らかく表現。研究科と学部でカラーリングを別に設定。



2007年

理学系研究科・理学部

青部分は理学部の「リ」、黄部分はScienceの「S」。高対称性の形状が理学部らしさを示唆。



2014年

社会科学研究所

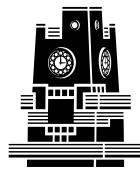
法・政治・経済・社会という4分野の羽を備えた「知の手裏剣」で世界を見ることを表現。



2016年

生産技術研究所

銀杏バッジに瓜二つなのは、第二工学部が研究所の前身のため。2016年、さらに洗練された形に。



2017年

先端科学技術研究センター

30周年を機にロゴを刷新。モチーフは13号館の時計台。客員研究員の神原秀夫さん作。



**学内マスコット
できた順アルバム**

1. 2005年 ユータスクン
2. 2006年 こまとちゃん
3. 2006年 いちようくん
4. 2006年 ハラにゃん
5. 2007年 UTokyo-Twins
6. 2007年 こまつけろ
7. 2007年 うーたん、ガストフ、赤門爺
8. 2009年 イチ公
9. 2009年 Miyoちゃん
10. 2010年 キメラくん
11. 2010年 もりかも
12. 2011年 ISTy
13. 2012年 めい
14. 2012年 ごろごろー
15. 2012年 物性犬
16. 2012年 メーユ
17. 2013年 ことだまくん
18. 2014年 ヘリウムくんとチッソちゃん
19. 2015年 うのとくん
20. 2016年 びびり
21. 2017年 メムー

1 学務システムUTask-Webの宇宙鳥。
2 駒場図書館の建物キャラ。本好きの学生が大好き。3 「学内広報」の銀杏(埋め草絵出身)。4 ハラスメント相談所の猫。5 UTokyo試案サイトの兄弟猫(トキオとユニオ)。6 駒場祭の蛙。住処は駒場池。7 東大130周年記念事業の公募入選キャラ。8 七大戦を機に生まれた運動会の犬。名は一高から。9 教養学部英語部会編著『東大英単』の猫。10 情報学環10周年記念キャラ。情報知の熱帯雨林に住む。11 濱田純一総長期の「行動シナリオ」応援鴨。12 情報理工学系研究科の10周年記念キャラ。13 紙と銀杏の実が大好きな五月祭の羊。14 柏キャンパス一般公開の河童。住処は五六郎池。15 物性研究所のPRが任務の柏餅のような犬。16 大気海洋研究所・東北マリンサイエンス拠点形成事業の広報大使。17 コミュニケーションの大切さを伝えるバリアフリー支援室のキャラ。18 寒剤供給業務と事故防止を訴える低温センターのキャラ。19 農学生命科学図書館のキャラ。20 大学総合教育研究センター「東大TV」のキャラ。21 大学総合教育研究センター「東大ナビ」のキャラ。

モノの向こうに140年間に立ち現れる 東大・歴史的グッズ集

東京大学文書館では、大学史に関する資料を幅広く収集しています。様々な部局・部署、退職した教職員、卒業生やそのご家族の皆さんなどから寄せられた資料には、紙の書類ではないモノ資料も含まれます。現実存在するモノの姿を通じて、140年の歩みを感じていただきましょう。



1889(明治22)年 |

陸上運動会の 銀製カップ

近代スポーツは外国人雇教師が熱心に導入。競技会としての運動会は明治20年から始まった。これは明治22年の秋季陸上運動会440ヤードレース優勝者に司法省顧問のウィリアムズ(英)が授与したカップ。

1890(明治23)年頃 |

教育勅語と避難用の背負子

明治23年に下賜された「教育ニ関スル勅語」は、翌年1月に当時の官立学校へ謄本が配布された。謄本といっても署名は明治天皇親筆であり、御璽が押されている。本学には本部と各分科大学宛に計7通交付されたとの記録があり、2通が現存する。また、緊急時に教育勅語と御真影を撤出するためと考えられる背負子も残されている。中は金庫になっており、五七桐の家紋を照らす豆電球も備えられた作りである。使われることはあったのだろうか。



1897(明治30)年以降 |

東京帝国大学公印

一つの公印をどのぐらいの期間使用したのかはまだ確認できていないが、この印は東京帝国大学として最後まで用いられていたものようだ。昭和25年の第二工学部の卒業証書に同一の印影が見える。

1913(大正2)年 |

恩賜の銀時計

卒業式の際に天皇陛下から優等生へ銀時計が下賜される制度は、明治32年から大正7年まで行われ、合計323名に授与された。優等生の選出基準は見つからないが、成績だけでなく、人物面も評価されたようである。

1939(昭和14)年 |

一高艇部の手ぬぐい

端艇、つまりボート競技は、戦前の高等学校・大学の学生生活で重要な位置を占めるものだった。一高は明治26年に高等商業学校(一橋大学)と共有で浅草に艇庫を設け、学内や他校との対抗戦でしごを削った。



1899(明治32)年以降 |

「帝大」ネクタイピン

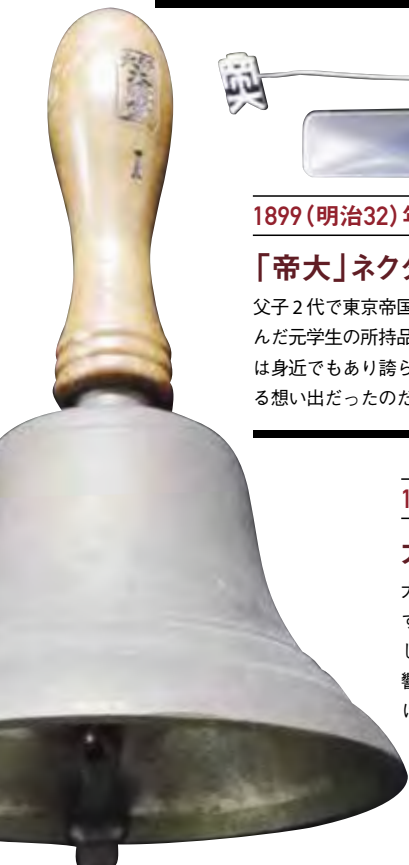
父子2代で東京帝国大学に学んだ元学生の所持品。「帝大」は身近でもあり誇らしくもある思い出だったのだろう。



1925(大正14)年以降 |

大講堂の振り鐘

大講堂(安田講堂)での催事の進行表には必ず「振鈴」の指示があり、催事開始の合図としていた。広い講堂でざわついた中でも音が響くように作ったためだろう、振ると思いがけないほど大きな音がする。





1943(昭和18)年

学徒出陣壮行会の日章旗

昭和18年に始まった学徒出陣については、その定義、学生たちの従軍や帰還／戦死等の把握、学生たちの思いなど、実態解明も評価も一筋縄ではいかない。しかし確かなのは、学生の勉学の機会が奪われたことである。



1970(昭和45)年頃

大学紛争時の楯とヘルメット

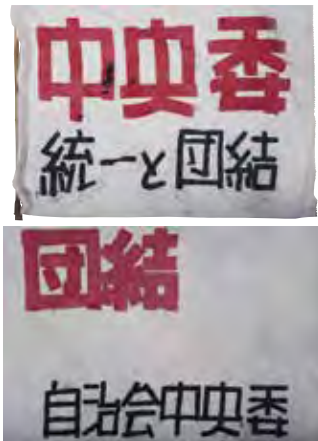
古希世代以上は、ヘルメットを見ればどの党派かすぐにわかるかもしれない。このヘルメットと楯は、旧学生課で保管していたものだが、保管に至った経緯は不明。東大紛争から50年、客観的な分析が必要な時期である。



1980(昭和55)年頃

教育学部学生自治会の旗

大学史料室(文書館の前身)にこの旗を含む資料一式が運び込まれたのは平成9年。すでに教育学部の学生自治会は解散しており、活動が終息していたことがわかる。モノがどうい変遷をたどったかに注目すると、社会が透けて見える。



1997(平成9)年

東京大学120周年ピンバッジ

創立120周年時、映像作成や「東京大学」展などの大きな記念事業が行われた。この小さなピンバッジ作成もその一環。

1993(平成5)年

乗鞍観測所 40周年記念時計

ノーベル賞を生む宇宙線研究所の起源は昭和25年に乗鞍に建てられた小さな観測小屋だった。40周年は乗鞍観測所が設置された昭和28年を起点としたもの。



2005(平成17)年

ホームカミングデイの手ぬぐい

この手拭いは、新たに東大マーク(→p18)が制定された翌年にも販売されていた。古い銀杏マークの品はすでに珍品だったか。



2007(平成19)年

数物連携宇宙研究機構 発足記念の文鎮

元職員が大切にしていたノベルティグッズ。一辺が2億光年の宇宙空間の構造が閉じこめられている。宇宙の謎の解明を目指して発足した機構は昨年10周年式典を開催した。



2013(平成25)年

観測船「弥生」 竣工記念の文鎮

「弥生」は大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターの船。東日本震災で失われた先代の後を継ぐ新「弥生」が大槌を母港に調査と復興に貢献中。



森本祥子／文
文書館准教授



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

東京大学文書館とは

東京大学文書館は、歴史的に重要な大学の法人文書を保存する機能と、広く東京大学関係の資料を保存する機能を、併せ持ちます。それにより、東京大学の来し方を理解し行く末をデザインするための、信頼できる情報を広く提供しています。今後、所蔵資料のデジタル化も推進しつつさらなる情報発信に努めていきます。

15万人が来場する本郷の学園祭 五月祭パンフの変遷

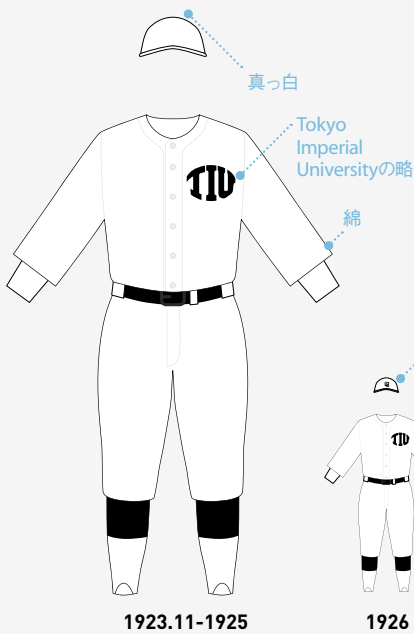


毎年5月に本郷で開催される学園祭、五月祭。その起源は、1923年5月5日に新入生歓迎会を兼ねて行われた、学友会大会の大園遊会です。記録によると、午前中は各学部を開放して日頃は部外者に窺い知れない機械などを観覧させ、正午からは学生の自治問題を討議、午後3時から運動場（現・御殿下グラウンド）で園遊会を開催した模様。会はその後、大懇親会や全学解放などと名を変え、第10回

頃から五月祭と呼ばれるようになりました。

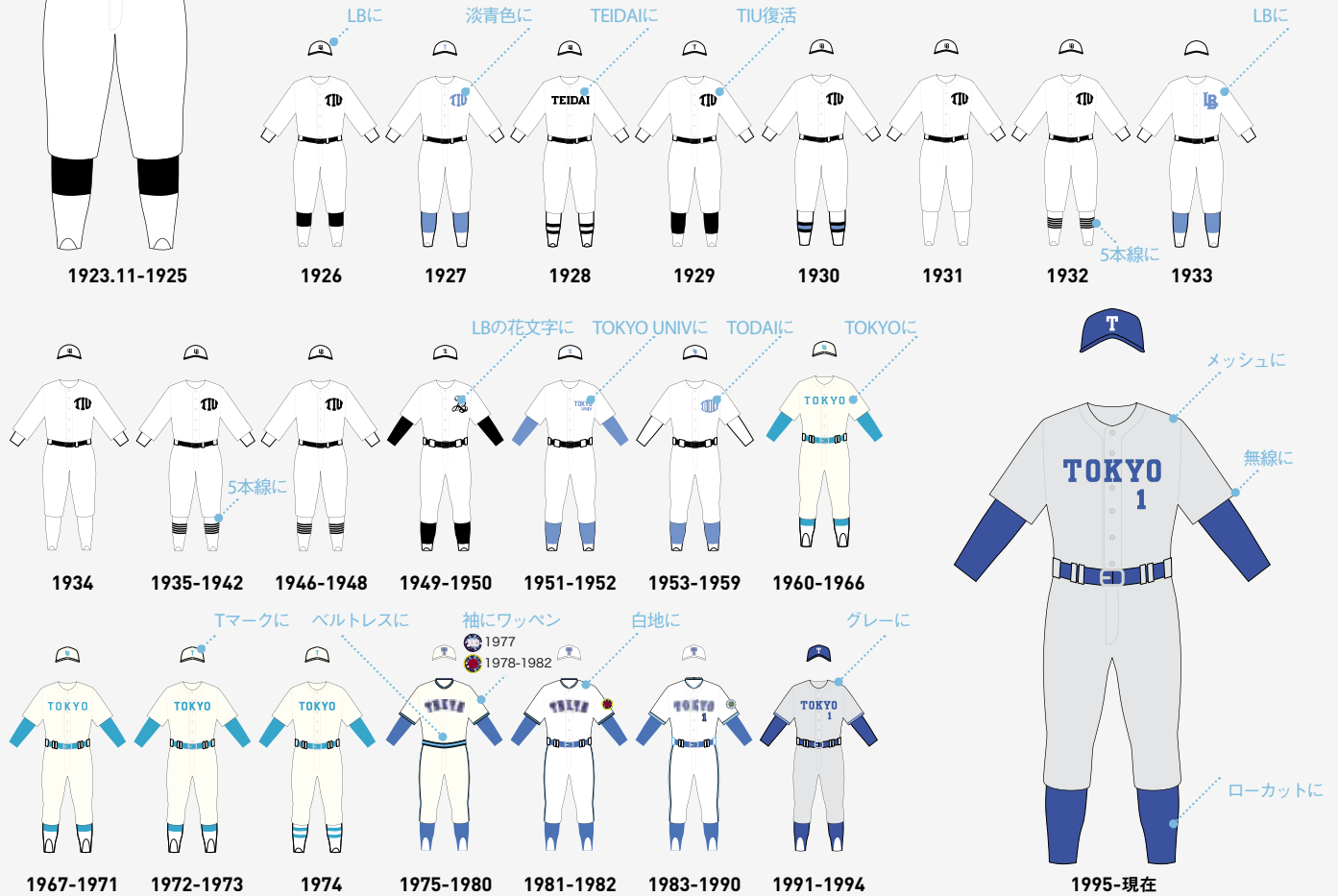
文書館に残るパンフで一番古いのは第20回。講演会には内田祥三や三宅雪嶺の名が、二日目には「鍛錬体操実演」「煙幕実験」「火炎放射機実験」と気になる催しが記されています。1970年代には「腐朽せる巨像の肺腑に凶撃を」(44回)、「間に血迷えるリヴァイアサンに振りおろさん変革の刃を！」(47回)、「歴史の激流のただ中に築き上げよう我らの真実を！」

(48回)、「迫りくる混沌のあらしの中で今こそ科学の炎をかざせ」(50回)などと扇動的な言葉が表紙に躍りましたが、80年代には平和なイラストが主となり楳文は影を潜めます。この20年は、「可能性の玉手箱」(72回)、「Re Academic」(80回)、「花咲く未来、建造中」(87回)、「東大生に、恋した日。」(89回)、「つつむ、ひらく」(90回)と短いコピーを入れる形が主流。最新形は5月に本郷で確認を。



神宮で躍動する「赤門軍団」の勝負服

野球部ユニフォームの変遷



- 1 大正14年六大学野球連盟加盟時のメンバー。2 昭和22年春季リーグ開会式。前年の2位躍進が発端で応援部が創部。
3 昭和56年春季リーグで歴代最多の6勝を挙げ4位に。4 平成29年秋季リーグで15年ぶりの勝ち点獲得（法大から）。

画像提供 / 東京大学野球部一誠会・野球部100年史編集委員会



柳田海さん
硬式野球部マネージャー

1919年創部の野球部は、1925年に東京五大学野球連盟に加盟（そして東京六大学野球連盟が発足）。当初は荒川区にあった尾久球場で、その後は駒場の野球場で練習に励みましたが、1937年に東大球場と合宿所（一誠寮）が完成し、拠点を本郷に移しました。

ユニフォームの登場は1923年。細かい変更

を繰り返し、地色グレー＋差し色ブルーの今のデザインに至りました。マネージャーの柳田さんによると、他の五大学ではこれほど頻繁に変更しておらず、時代とともに変遷を楽しめるのは東大野球部の特徴と言えます。

2019年に100周年を迎える野球部では、式典の開催や100年史刊行などの記念企画を検討中。ユニフォームの変遷も2020年春刊行予定の100年史でさらに掘り下げて扱う予定

です。「昨季は念願の勝ち点獲得を果たしましたが、惜しくも最下位脱出はなりませんでしたが、2018年シーズン、そして100周年の節目となる2019年シーズンでさらに高みへと昇れるよう部員一同練習に励みます。今後ご支援をよろしくお願いたします」（柳田さん）。

今は少し濃い青ですが、本来のチームカラーはライトブルー。もしかしたら、近い将来、神宮で淡青色の「赤門軍団」に会えるかも!?



東大140年、回顧と展望

消えた「大学」、大学と身分闘争、
ディシプリンと組織、
空間としての東大、掛け算の歴史……

2027年に150周年を迎える東京大学では、すでに150年史編纂の構想が動き始めています。このほど、本学の歴史に詳しい佐藤先生の呼びかけで、大学の歴史に一家言持つ5人の論客が文学部図書室に集結。過去の140年をどう捉えるか、150年史のあるべき形、一つの節目を越えた東大の将来像という3つのお題を念頭に置きながら、しばし座談に興じました。

佐藤 加藤先生は昨年10月の140周年記念講演会に登壇され、「東大の歴史 日本の歴史」という、たいへん興味深い題名で講演されました。

加藤 東大のルーツをたどると「大学本校」「大学南校」「大学東校」*1が出てきますが、「本校」は途中で消えています。昌平学校を継承し国学と漢学を担っていた組織が1877年の東大創設時に消え、洋学中心の南校・開成学校を継いだ法・理・文3学部の和漢文学科に縮減されてしまう。明治政府の判断は、天皇を政治から離し、神格化することでした。後にバランスを考える元老がいなくなった瞬間、天皇の神格化が進み、日本は帝国主義の道をたどります。国家も東大の学問もそれで毀損された。近代日本が負ったものを国家須要の学問を行う大学が担ったという歴史を忘れてはいけない、という意味での題名付けでした。150周年の際には東大の起源をどこに置くかも含めて書くべきだという思いもこめました。





佐藤健二 Kenji Sato

人文社会系研究科教授（研究科長）。歴史社会学。著書に『浅草公園 凌雲閣十二階』（弘文堂）、『柳田国男の歴史社会学』（セリカ書房）ほか。

分野の選択には身分闘争の面も

橋本●国家と大学の話で私が思い起こすのは、東大紛争の際、大学解体、反大学が唱えられたことです。明治百年のタイミングで、東大の帝国主義的な体質を全共闘側が問いかけたわけです。我が国初の大学が国家とどう向き合うかという、やはり国を担がざるをえない部分はあった。しかしそれに対する自己反省はやはり必要だったろうと思います。国を代表しつつ、東大が担わなかった分野もあります。他大にある福祉学部などは東大には生まれませんでした。東大には、近代学術のコアになる分野を担ってきた反面、そぎ落としてきた部分もあり、その選択には国家や大学の意志が働いていた。そこに教員の身分闘争の面があったことも見逃せません。たとえば、大学東校が担っていた医学は、武士には遠い分野でした。東大に医学部が入ることで医師や医学の地位が上がるという側面があったように思います。国学と漢学の話も、そうした文脈上にあったのかもしれませんが。

藤井●身分の話でいうと、東京大学では卒業生全員が学士号をもらえたのに、工部大学校では優等生だけがもらえました。工学部の前身の一つである工部大学校は階層が低かった。創設時からある法・理・文・医は地位が高く、後から加わった工や農は少し下、という感覚が学内にはあったと思います。「身分」というと語弊がありますが、東大では各学部の力が大きく、いまま総合大学になりきれいな

い部分がありますね。東日本大震災後の授業再開時期を決める際に顕著でしたし、先日、学外の人に、授業の始業時刻が全学で揃ったという話をしたら、「なにを今さら？」と大笑いされました。

橋本●これだけカリキュラムの運用がバラバラな大学も珍しいでしょうね。

宇野●台風の日には特に感じます。他大学だと本部が授業の有無を判断してホームページで一斉通知しますが、東大は学部ごとに対応が違います。

佐藤●秦の故事をみても、「帝国」には暦と貨幣と度量衡の統一は不可欠なんですけどね。分科大学の連合でしたからね。

橋本●ディシプリンの点では、学部はがっちり固め、新しい分野はそれ以外で担うという傾向が東大にはあると思います。

藤井●学部はずっと10前後のままですが、全学センター^{※2}や機構は数多く生まれてきましたね。

宇野●東大は文明の配電盤として発達した、と言われますが、西洋学問の輸入にばかり強調点が置かれてきたのは、少し偏った理解でしょう。江戸時代の学問といえば朱子学や陽明学、対抗して荻生徂徠らの儒学が発展し、多様な学問が展開した後に明治維新がありました。荻部直^{※3}さんが指摘するように、文明の素地が江戸時代にあったからこそ西洋の学問を受け入れられたはずです。思うに、近代国家に役立つ存在というイメージだけで大学を語るのは時代に合いません。たとえば社会科学と人文学という区別は19世紀的ですが、こうした分類自体が現在まで固定化されています。これまで研究所、全学センターや機構を増やすことで対応してきましたが、学部の構成は基本的に変わっていません。伝統を大切にしたい反面、ある時代の枠組みが固定化しすぎるのはよくない気がします。

佐藤●文学部でいうと、ディシプリンの再生産は研究室を抜きに語れません。明治30年代に留学から戻った人たちが土台をつくった。いまま、組織・制度としては未整備ですが、実質は講義が行われる

教室ではなく、学生と教員が交流し、参考図書を備えた研究室が専門分野を支える構造が大正期には明確につくられました。では法学部では？あるいは工学部ではどうか？各部局の構造の存立の事情をたどると面白いでしょうね。

橋本●明治30年頃までは、どの学部でも教員には行政官の意識が強かったはずで、講座制ができ、俸給制の適正化もあって、自分の学問分野に責任を持つという意識が生じました。大学教授という身分意識の誕生、研究室体制の確立、ディシプリン再生産の機運の高まりはパレルだったでしょう。

歴史を書きたくなる画期とは？

加藤●私は、いつ書きたくなるか、から年史を聞きたいと思います。何か画期をなすことがあったときに人は歴史を書こうと思ひ立ちます。法人化の失敗も可能性も描けることこそが、150年史を書こうと動き出したいまを表す画期なのかと思うのです。私見ですが……。

佐藤●100年史^{※4}編纂を機に大学史史料室（現・文書館）ができましたが、150年史の編纂はどういう形で資料を共有し残すか。電子的な技術を活用しながら大学史をどう考えていけるかは、研究基盤をどう支えるかにもつながるでしょう。

宇野●50年史、100年史の頃は、過去が失われてしまうことへの危機意識があったのでしょうか。150年史ではAIの影響が大きい気がします。近代日本の何を継承して世界に開くか。それを考えるのが150

加藤陽子 Yoko Kato

人文社会系研究科教授。日本近現代史。著書に『戦争まで』（朝日出版社）、『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（新潮文庫）ほか。





藤井 恵介 Keisuke Fujii

工学系研究科教授。建築史。共著に『日本建築様式史』（美術出版社）、『建築の歴史』（中公文庫）、『関野貞アジア踏査』（東京大学総合研究博物館）ほか。

年史のタイミングだと思います。

藤井 工学部の学科は100年史の後に大きく変化しました。造船のように消失した学科がある一方、生命工学のように新設された学科もある。産業構造の変化や企業の需要に応じた部分もあります。150年史では、制度的な学科史よりもむしろ、どういう研究がされたのか、社会と研究がどう関わってきたかを書いたほうがよいのではないかと思います。たとえば理系では各専門でディシプリンを支える基本技術があります。生命工学なら、血液を扱う際にどの大きさの穴を通せばいいか、というろ過膜の技術でしょうか。その膜の開発が関連する研究や連携する社会をすべて変えてしまう。こういう技術がどの分野にもある。それらを継承せずAIに移行するのは危険です。AIに何ができて何ができないのかを、学部教育から意識させたい。たとえば机をつくるにはどういう材料でどう組み合わせるか。電気が全く使えない世界でどうするか。足元を知らずに頭上の部分を知るだけではまずい。基本技術と先端技術は共存しているのです。

加藤 私は人間が書かれなければいけないと思っています。東大の研究者の列伝を皆で書き加えていくイメージを温めています。興味を持つ人が自由に閲覧できるよう知を集めて公開する。たとえば台湾の人は日本語ができなくても漢字をたどれば大部分の意味はわかります。文系のアジア圏への発信では、日本語で粗々でも出す意味が大きいと思います。

佐藤 100年史は通史と部局史と参考資料という3部構成でしたが、150年史ワーキンググループではテーマ史という領域を検討しています。以前に日立の社史を調べたら、鉱山の坑道で必要な掘削や運搬や照明などの技術を自前で開発し修理製造しているうちに、エレベーターや新幹線、造船からコンピュータ、家電も原発も様々な機器を生みだす巨大な会社連合ができていました。電力という力がどんなモノを通じて、いかに社会と人間の生活を変革していったかが、ひとつの「企業」の歴史から見えて面白かったんです。東大ならばそういう切り口で近代の大学の歴史を語れるかもしれません。

橋本 いいですね。読者はどう設定しますか。本は売れたほうがいいですよ。

佐藤 家具として飾りだけの本ではもっていないですね。理想は若い人が大学で学ぶ価値を感じられる本、でしょうか。

宇野 研究者がこれまでの学術を振り返るための基礎資料と、東大の学術を世間に知ってもらうための読み物という、その両方を狙っているのでは。

加藤 憧れも大事ですよ。漱石の三四郎にしる、鷗外の『雁』の医学生にしる、東大が素敵な存在として語られていました。未来に向けて憧れが感じられるコンテンツを加えたい。ろ過膜のような技術は、たとえばノーベル賞の研究も支えていますよね。研究を支えることの価値も憧れに結びつくかもしれません。

藤井 ノーベル賞をもらうのは一人ですが、その候補は毎年10人ほどいます。同水準の研究がそれだけあり、その人を支える人が周りに多数いる。大学はそういう場でもあることを発信したらいいと思います。面白い研究はたくさんあるのに、学外にうまく見えていない気がします。

加藤 日本史学には100人ほど学生・院生がいますが、彼らの意欲を支えるのは主に有期雇用の副手です。文理を問わずかもしれませんが、研究の現場を支える彼・彼女らの役割は実は非常に大きい。そこに光をあてて誰か書いたら……。

大学の場の力が知を発展させた

宇野 高校生に訴えるのはスター研究者でしょうが、学問の深みを伝えるにはその周辺に目を向けるのもいいかもしれません。大学では、場の力が知を維持し、発展させてきた側面が大きいですから。

橋本 たしかに各学部や研究室で継承するディシプリンをどう拡大再生産していくかが、これまでの年史でうまく言語化されていない気がします。

佐藤 たとえば文学部学友会の『会報』など、研究室を基盤に編集され、そうした情報を伝えていた冊子はたくさんあったはずですが、狭い範囲だけでしか共有されなかった。これを期に学内でアーカイブするため、卒業生への呼びかけも必要です。

加藤 評価という点でいうと、卒業生にも昨今の大学ランキングに忸怩たる思いを持つ人は多いと思います。比較の中で自らを捉えるという視点はこれまでの東大にあったのでしょうか。

佐藤 いまは国際比較が盛んですが、明治の頃は少なくとも数値には関心がなかったでしょうね。

藤井 理系では、1970年代にポストクとして国内より進んだ外国に行くのが普通になりました。いまは外に出なくても足りるし、外から研究員や留学生がやってくる。工学部も中国人留学生がかなり多いですが、彼らが皆帰国して活躍するとしたら、東大は博士号を与えて返すサービスマスターをやっているようです。

橋本 鉦市 Koichi Hashimoto

教育学研究科教授。高等教育論。著書に『高等教育の政策過程』『専門職の報酬と職域』『大学生 キャンパスの生態史』（玉川大学出版部）ほか。





宇野重規 Shigeki Uno

社会科学研究所教授。政治思想史。著書に『保守主義とは何か』（中公新書）、『政治哲学的考察』（岩波書店）、『民主主義のつくり方』（筑摩選書）ほか。

っ白な年表に事実をたくさん書き込んで足し合わせた結果が歴史だと思われる。しかし、これは決定的に不十分です。現在の関心が掛け合わされなければ、そもそも意味が生まれず、歴史にならないという考えに私は立ちたい。現在の関心と問題意識なしに、史料は何も語らない。150年史はさまざまな問題関心が掛けあわせられた東京大学の歴史になるといいます。

（2018年1月4日、文学部布文館にて）

はみ出しトーク

宇野 ● 加藤先生、私とボールペンが同じですね。

加藤 ● シング0.5mmが好みなんです。

橋本 ● 私はジェットストリーム0.7mmです。

宇野 ● お持ちのファイルは……。

橋本 ● 京大式カード！

加藤 ● 通常は編年式でまとめていますが今日は140周年講演会の部分を入れ替えてきました。

佐藤 ● 加藤先生には知的生産の技術史も書いてもらいましょうか!?

宇野 ● 東大で優秀に育てた後、日本でも活躍してもらえるといいんですけどね。ランキングが下がり、優秀な留学生は博士号を与えて返すだけでは二重の意味で敗けです。ただ、希望もあります。私の演習には中国や韓国からの留学生が参加してくれますが、日本の学生が関心を持たない日本の過去の学問の歴史に興味をもって研究してくれる人が多いのです。

藤井 ● 私の研究室も全く同じです。日本人学生が興味を示さない過去のテーマでも留学生は別です。日本人学生には面白さが伝わっていないのか……。

加藤 ● これは歴史研究者の高望みかもしれないのですけれども、全ての学部それぞれの学問の「史」に関わる研究者を置けばいいと思います。そうすれば各々の学問の面白さを直接伝えられるはず。

藤井 ● 150周年の記念事業としては破格かもしれませんが、どういう学術の系譜に自分が位置するのかを全教員が提出するといいいのではないのでしょうかね。理系だと、どんな実験道具を使ってきたか、文系だとどんな本を書いてきたかも含めて語っていったら、面白い歴史になりそうに思います。

橋本 ● 個人の研究プロフィールの整理からディシプリンの概要が把握できれば、非常に興味深い試みになりますね。

佐藤 ● 200年史となるとデータも含めた大きな枠組みでの全集のような書籍が必要かもしれませんが、150年史は少し自由にやってもいい気がするんです。

宇野 ● 実際、データをただ文章化しただけではやはり不十分です。過去の学問の見方を言語化し、再利用できるようなものにしたいですね。

藤井 ● ケンブリッジやオックスフォード

に公式の大学史はないと聞きます。大学史の本はあっても著者ベース。だからこそ自由に書ける。150年史も著者責任の形にしているのでは。

佐藤 ● 藤井先生ならテーマは「空間として発展してきた東京大学」でしょうか。

宇野 ● アメリカのトップ校に行くと、キャンパスが必ず古さと新しさを共存させていて、それが大学の格を決めている気がします。

加藤 ● 東大に観光や下見でやってくる海外の方の記念撮影観光客の記念撮影はほぼ古い建物の前ですよ。

藤井 ● もし新しい建物より古い建物のほうがいいという人が多ければ、本郷はオックスフォードのような素敵でキャンパスにできるでしょう。壊さずに改良しながら使う工夫が上手な建築家が東大にはたくさんいますから。

橋本 ● 忘れがちですが、大学という組織としては職員側の歴史も必要でしょう。

佐藤 ● 評議会や教授会の資料とか、学生資料とか、倉庫に眠る事務文書は膨大です。ただ、個人情報の問題もあり、活用を進めるには全学を巻き込む工夫と合意が必要でしょうね。

過去の知を可視化して次に進む

宇野 ● こうしてみると、150周年に向けて、文書、学問技法、建物まで、全てを保存し資産化する機運を高める必要があるようです。ただ、単なる過去の記録というだけでは合意を得にくいですね。過去の知を体系化し、可視化して次に進むのに不可欠な材料だと示すべきです。

佐藤 ● われわれがイメージしている歴史には、「足し算の歴史」と「掛け算の歴史」があると思うのです。たとえば真

脚注

※1 大学南校は蕃書調所や開成所の流れを汲む洋学校。大学東校は種痘所や医学所の流れを汲む医学校。南と東は本校から見た方角。

※2 現在、総合研究博物館、低温センター、アイソトープ総合センター、環境安全研究センター、人工物工学研究センター、生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター、大学総合教育研

究センター、空間情報科学研究センター、情報基盤センター、素粒子物理国際研究センター、大規模集積システム設計教育研究センター、政策ビジョン研究センター、高大接続研究開発センターと14の全学センターがある。

※3 法学政治学研究所教授。当該の指摘は著書『「維新革命」への道』（新潮選書）に。

※4 『東京大学百年史』は1977年から1987年に刊行。通史3巻、資料3巻、部局史4巻の計10巻からなる大著。『東京帝国大学五十年史』（上下冊）は1932年刊。国史学科の副手だった大久保利謙（大久保利通の孫）が実質的には一人で原稿を書いたといわれる。

森を食べる植物

不思議で美しい腐生植物の世界

「腐生植物」という字面から連想するのは、枯れて腐った植物や、死んだ動物の上に生える植物かもしれませんが、理学系研究科附属植物園の園長も務める塚谷先生によれば、それは「森を食べる」植物。白い歯も緑の葉もない植物がどうやって森を食べるのか、美しく風変わりな姿に魅せられた専門家の紹介文から想像してください。



塚谷裕一／文
理学系研究科教授
<http://www.bs.s.u-tokyo.ac.jp/~bionev2/jp/>



木

と植物の関係というのは、ふつうは植物があって初めて森がある、植物が集まって森となる、といったものです。しかし世の中には、森があるからこそ存在できる植物というものもあります。私が学生の頃から興味を持っていた腐生植物は、まさにそうした植物です。言うなれば、森を食べる植物なのです。

なぜ森を食べると表現するか理解するには、腐生植物の暮らし方を見ていただくほかありません。

日本で一番広く多くの人の眼に触れている腐生植物は、ギンリョウソウでしょう。ギンリョウソウは純白にきらめく花被片の内側に黄色い葯をならべており、その中心には藍色に濡れて光る柱頭も持っていて、あきらかに種子植物です。しかし緑の葉がありません。通常の種子植物は緑の葉をつかって光合成を営み、それによって自らのエネルギー源と体の資本とを得ています。ところがギンリョウソウはそれができません。その代わり、その根でキノコを食べて栄養を得ています。

ギンリョウソウは、その根に侵入してきたキノコの菌糸から、逆に栄養を奪っているの

です。一方その被害者たるキノコの方は、森の営みから日々の栄養を摂っている生き物です。ギンリョウソウはそのキノコの、森から得た稼ぎを横取りして、花を咲かせているわけです。森を食べる植物という表現は、こうした暮らし方由来しています。

したがって、腐ったものに生える植物という意味合いの、「腐生植物」という語は本当は誤りです。最近により正確な表現として、菌寄生植物といった言い方が推奨されるようになってきました。菌に寄生して暮らす植物というわけです。

さてこういう変わった暮らし方をしていると、人の目に付きにくくなります。緑の葉を持っていれば、花がない時期でも人はその存在に気づきます。たとえば桜の場合、花がなく葉のみが生い茂っている夏場ですと、桜とは気付かない人も多いでしょうが、なにか大きな木だな、ということくらいは誰でも気づくでしょう。ところが腐生植物は緑の葉を持ちませんから、花が咲く時期以外は地下に潜って暮らしていて、人の眼に触れません。そのため、見落とされている種類も非常に多いのです。

例えば東南アジアの熱帯雨林を歩いてみれば、ほぼ確実にまだ世に知られていない腐生植物を見つけることができます。いや、地球上で最も徹底的に植物の戸籍調べがなされた地域の一つ、日本ですら、まだ毎年のように新種の腐生植物が発見されています。

おかげで私はこれまでに多くの腐生植物の新種を発見し、命名することができました。しかし私の研究のメインテーマは、実は、腐生植物が持たない緑の葉、その形作りのメカニズムです。最近はその研究成果をヒントに、腐生植物がいかにして緑の葉を失ったのか、なんとか解明できないものかと考え始めています。日本は実は腐生植物研究の中心地の一つ。より多くの方に興味を持っていただこうと、昨年『森を食べる植物』という本を出しました。まだ世の図鑑では写真を見ることのできない珍しい種類も多数紹介していますので、是非ご覧下さい。



2



3



4

- 1 日本の腐生植物を代表する花、タヌキノシヨクダイ。「シヨクダイ」はろうそくを立てる燭台のことですが、狸の姿に喩えた名ではありません。
- 2 インドネシアのプトウン・クリフン国立公園で塚谷先生が見つけたタヌキノシヨクダイ属の新種、*Thismia betung-kerihunensis*。翡翠色の美しい姿を目にした瞬間、大声で叫んだそうです。
- 3 マレーシアのマリアウ盆地で探索した*Thismia hexagona* var. *grandiflora*。六角形に広がった大きな花が特徴です。
- 4 西表島での野外実習で観察されたイリオモテムヨウランも腐生植物の一つ。漢字で書けば「無葉蘭」です。

塚谷先生の本
『森を食べる植物』
(2016年刊／岩波書店／
2000円＋税)



自然の生命知で芸術をさらに面白く ゆらぎ渦巻く情報造形の世界

情報を芸術的なレベルで造形することに取り組む河口先生。カンブリア紀からの地球生物の進化は芸術の宝庫だと見抜き、生物を「遊泳系」「歩行系」「飛翔系」に分けて「自己組織的」に研究してきました。独自世界へと読者を誘う言葉はやはり独特。芸術的な研究者か、研究者肌の芸術家か。それは読んでのお楽しみ。



宇宙蝶 Bucco

自己組織化する

自 然界には多くの螺旋が見受けられます。巻貝のように、要素の連続から生まれた螺旋の造形は、プログラミングすることで、アートにも応用できます。

アートが自ら自分で自分の未来をクリエイトすることを考えてきました。

1976年から始めた自己組織的な造形モデルでは、今や人の動きに反応して、複雑な螺旋のグローブ造形が、揺らいだりねじれたり、踊ったりすることが可能になりました。たくさんの子供たちが自分の動きに反応してくれる自己組織的造形と遊んでいます。

ジェモーションの細胞膜

反応する格子状の被膜のような研究は、人が押した圧力に反して、生き物のように反動的に押し上げることから2000年に始まりました。凹凸に反応するジェモーション (Gemotion = gene + emotion) プロジェクトでは、格子状の要素面が生き物のようにエモーシ

宇宙探検するエギーちゃん



遊泳する宇宙魚 Ficco

ナルに凹凸反応します。

細胞の集合体で、上下左右に隣接する細胞同士が、相互関係の一定のルールで、オン(生)／オフ(死)の生成消滅を繰り返すセル・オートマトンのようになっています。

壁面があたかもエモーショナルに凹凸するとなると、生き物のように呼吸を始めることとなります。未来の新たなアート空間としても壁面が生き物のように凹凸するのは、触ってみても魅力に満ち溢れて楽しくなります。

インテリジェントな挙動

生まれたばかりの四足生物を考えてみましょう。まだ、どう動いて良いのか何も知らない。前に進むこともわからない。立ち上がれない。何度も転んでばかりです。しかし、や

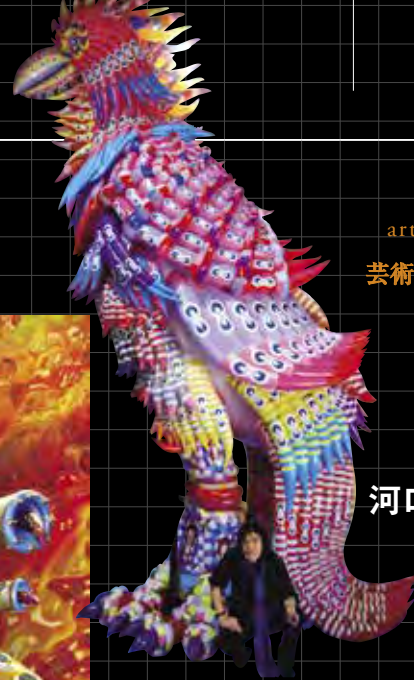
自己組織化する複雑系
グローブ・モデル

Invitation
to
art & science
芸術と科学への
招待



河口洋一郎 / 文
情報学環教授
(種子島出身)

<http://individuals.iui.u-tokyo.ac.jp/~yoichiro/>



飛翔しようとする宇宙鳳凰 Phoecco

がようやく立つことができました。少しずつ前に進もうとします。それでも、転びます。前に足を進めようとしても、なかなか進めない。足が震えながらも、ちょっとずつ歩こうとします。でも、なんとか少しずつ前に歩こうとしてきました。よちよち歩きです。喜びを表現しようとバンザイしました。

バンザイしても何回も転んでいます。四足生物はまるで赤ちゃんのようです。

未来のアートはもう一つの生命体

生まれたてのアートが、よちよち歩きしながら成長し始めていく。アートが立ち上がった。転んだりしながら、泣いたり笑ったりを繰り返しながら成長していくもう一つのアート。アートは、自己学習しながら、自分で自分の未来を創出していくことになります。エモーショナルな自己成長をしながら個性的なものに成長していきます。

これからのアートは、コミュニケーションしながら、異次元での人の五感を刺激して、一緒に成長してくれる、もう一つの宇宙空間での生命体の仲間となります。

アートが子供や大人に夢と希望を与えながら、未来の魅力的な街づくりに寄与することを希望しています。

歩行する宇宙蟹
Cracco

本郷キャンパスの 国際学術総合研究棟が竣工

赤門を入ってすぐのところ、国際学術総合研究棟が竣工しました。地下1階、地上14階建てのこの棟は、文系の学際的交流を目指す総合研究棟。隣接する経済学研究棟の外壁線、軒線などを継承し、周囲にある建物との調和を大事に

しながら、香山壽夫建築研究所によって設計されました。5階までの低層部には多様な形態の大講義室を、6階以上には研究室を配置。経済学研究科、公共政策学連携研究部、人文社会系研究科を中心に利用されます。



8月30日に記念式典・祝賀会が挙行了されました。

8/30

未来社会協創推進本部の 情報発信がスタート

東京大学が2017年7月に設置した未来社会協創推進本部(UTokyo FSI)。人類社会の未来への貢献に向けた協創を推進するため、ウェブサイトでの情報発信を開始しました。SDGsの17目標に基づいて多様な活動を可視化する登録プロ

ジェクト制度を整備、約160(2017年2月現在)の取り組みが一覧できます。地域連携の取り組みを一望する地図コンテンツも要注目。学術を通じてSDGsの実現を目指す大学の現在地をご確認ください。www.u-tokyo.ac.jp/adm/fsi/ja/



FSIはFuture Society Initiativeの頭文字をつなげたもの。本部長は五神真総長。

9/5

10/7～12/10

軟式野球部が六大学を制覇し、 蹴道部が10連覇、 競技ダンス部は5連覇を達成!

このところ、東大アスリートたちの活躍には目覚ましいものがあります。10月、硬式野球部は東京六大学野球秋季リーグ戦で15年ぶりの勝ち点を獲得。立役者となった宮台康平投手はドラフト指名を経て北海道日本ハムファイターズへの入団が決定しました(東大出

身のプロ野球選手は6人目)。一方、軟式野球部は10月に東京六大学軟式野球秋季リーグ戦で優勝し、11月の東日本大会へ出場(ベスト8)。蹴道部は11月に行われた全国学生蹴道優勝大会で総合優勝を飾り前人未踏の10連覇を達成。陸上運動部の近藤秀一選手は11月の記録会で成績を収め、第94回箱根駅伝に関東学生連合チームとして出走することが内定。さらに、競技ダンス部は12月に行われた第62回全日本学生競技ダンス選手権大会で5連覇を達成し、大会の連続優勝記録更新に王手をかけました。学業だけでなくスポーツでも存在感を発揮する東大生にあたたかいご声援を。



箱根駅伝予選会で力走する「文武一道」の近藤選手。



ドラフト後の会見で宮台選手にイチ公が花を贈呈。



見事優勝を決め宙に舞う平野監督(工・3年)。



出場11競技中8競技を制しての総合優勝でした。

ワルツの部で個人優勝を果たした高木・片岡組。



東京大学、先端研、Kavli IPMU、医科研がそれぞれ周年イベントを開催

10~11月は周年イベントが目白押しでした。まず、10月11日、先端科学技術研究センターが創立30周年記念式典をANAインターコンチネンタルホテル東京で挙行。堺屋太一氏、岸輝雄名誉教授の基調講演、先端研6教員の講演のほか、13日には「先端研オリンピック」なるユニークな競技会もありました。10月16日には、カブリ数物連携宇宙研究機構（Kavli IPMU）が10周年記念式典を所内の藤原交流広場で開催。多くの祝辞と挨拶のほか、回顧ビデオの上映、村山斉機構長もコントラバスで加わった演奏、「歓喜の歌」合唱と、音の楽しみに溢れる式典でした。10月21日には、東京大学創設140周年記念講演会を安田講堂で開催。加

藤陽子（人文社会系研究科）、池谷裕二（薬学系研究科）の両教授が、研究に立脚しながら過去から未来を見通す講演を披露しました。11月29日には医科学研究所が創立125周年・改組50周年記念式典をシェラトン都ホテル東京で開催。村上善則所長が感染症・生命科学の歴史を総括し、記念講演会では梶田隆章先生、大村智先生のノーベル賞受賞者お二人も登壇されました。東京大学は今後も一歩一歩しっかりと歩みを重ねます。

池谷先生は「脳の現在と未来」の題で講演。



記念撮影する式典来賓とKavli IPMUのメンバー。



開会の辞を述べる医科研の村上所長。



式辞を述べる神崎亮平先端研所長。

10/11~11/29

12/17

ニューロインテリジェンス 国際研究機構が本格始動

2017年10月発足のニューロインテリジェンス国際研究機構（IRCN: International Research Center for Neurointelligence）は、Kavli IPMUに続き東大がホストとなる2つ目のWPI（文部科学省世界トップレベル研究拠点プログラム）拠点です。ニューロインテリ

ジェンスとは、脳の神経発達、精神障害、AIという3分野のシナジーによりIRCNが開拓する新分野。12月17日に伊藤国際学術研究センターで行った第1回国際シンポジウムで本格始動したIRCNは「ヒトの知性はどのように生じるか」という究極の問いに挑戦します。



挨拶するタカオ・ヘンシュ機構長。ロゴの脳は生命科学、電子回路は情報科学を象徴。

1/9

東大人を集中紹介するウェブ連載「UTOKYO VOICES」がスタート

優れた研究を生む東京大学の研究者のひとりは、実は社会にあまり知られていないのではないか。そんな思いから、東京大学が新しいウェブ連載を始めました。その名は「UTOKYO VOICES」。学内の研究科・学部、附置研究所、全学センターがそれぞれ自信を持って

推薦した研究者取材し、コンパクトな形で紹介する「現代東大研究者列伝」です。すでに13人が登場済み（2月23日現在）で、今後も続々と魅力的な研究者たちが登場予定。ご期待ください。www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utokyovoices_list.html



小学生の頃に「ミクロの決死圏」に衝撃を受けたという野崎先生（人文社会系研究科）。



2006年に前職場でもらった会議用の椅子を今も愛用中という濱中淳子先生（高大接続研究開発センター）。



東大マンホール曼荼羅

構内に無数にある円形のマンホール蓋。東大専用とわかるものを集めたところ、「帝下水」「東京帝國大學 暗」「東京帝國大學 暗渠」「東京帝國大學 電」「東大」「東京大学」「東京帝國大學 暗渠」「東京帝國大學 電」「東大」「東京大学」「東京大学 雨」「東京大学 汚」「東京大学・電」「東京大学・通信」「合流 東京大学」「第一高等學校 電」「一高下水」「傳染病研究所 電」「傳染病研究所 暗渠」「傳研下水」の文字列の違いに、字の向き（地が下／中心が下）、字の開始位置（6時／11時／12時）の別を加え、25種を確認しました。ほかに「帝大電気」や「航空研究所」の発見報告もあります。実は日本のマンホール蓋の原形の一つは、東京帝大工科大学教授を務めた中島鋭治博士が考案したものだとか。たまには足元だけ見る歴史散歩もいかがでしょうか。



ボクは
本郷・春日門付近にいるよ